

## 『教育週報』と児玉九十（2）

廣 嶋 龍太郎\*

### “Kyoiku-Shuho” and Kuju Kodama (2)

Ryutaro Hiroshima

キーワード：児玉九十、『教育週報』、日本教育史

Kuju Kodama, “Kyoiku-Shuho”, history of education in japan

#### はじめに

児玉九十(1888-1989)は大正期から昭和期の教育者であり、戦前においては成蹊学園の主事を経て明星実務学校(のちの明星中学校)の校長を務め、戦後においては明星大学を創設し初代学長を務めた人物である。拙稿「『教育週報』と児玉九十(1)」(『明星—明星教育センター研究紀要』第6号)では、『教育週報』の人物紹介や書評を通じた児玉九十評価を概観した<sup>1</sup>。これを受けて、本稿では同紙における児玉九十の参加した座談会記事や児玉九十談とされる記事、ならびに児玉九十による寄稿とされる記事(以下、児玉九十による記事とする)を中心に資料を検討する。

先行研究については、前稿で指摘した通り『教育週報』と児玉九十の関係を十分に検討したものはない<sup>2</sup>。また、児玉九十による記事の多くは児玉九十の著作集である『この道五十年』に収録されていないことから、児玉九十の一次資料として検討する価値があると考えられる。また、『この道五十年』に収録された作品についても解説はなく、どのような前後関係で掲載された記事が明らかにすることが必要であると考えられる。

『教育週報』における児玉九十の関連記事の中で児玉九十による寄稿と考えられるものは計45本であり、うち連名や座談会などの複数名によるものが30本である。児玉九十の関連記事の中で、前稿で扱った児玉を記事の対象としたもの(書評を含む)は9本であったことから、児玉自身が執筆に関わった記事の方が多いことが分かる。なお、大政翼賛会の中央協力会議に提出した議案を紹介する記事2本にも児玉の名前が見られるが、児玉九十による記事ではないため一覧には含めない<sup>3</sup>。加えて、児玉九十名義で年始の挨拶を掲載した広告記事もあったが一覧からは割愛した。

児玉九十による記事について、本稿ではその性格から次の三点に分けて論じたい。まず一点目は複数の参加者による座談会記事、二点目は座談会以外の複数執筆者による記事、三点目は児玉九十による単独記事である。

研究の方法としては、『教育週報』における児玉九十による記事を概観した上で、上記三点の記事の傾向を明らかにする。その中でも単独記事については、1面の巻頭記事の特徴にも言及する。加えて、『教育週報』の掲載作と『この道五十年』の収録作を比較し、著作集の収録傾向を指摘したい。なお本文中の旧漢字は適宜新漢字にあらためた。

---

\* 教育学部 准教授 日本教育史

## 1. 『教育週報』の紙面の特徴と児玉九十による記事の傾向

児玉九十の寄稿を検討する前に、掲載紙である『教育週報』の体裁と論調を踏まえておきたい。まず体裁であるが、『教育週報』はその名称が示す通り週刊という発行形式をとった教育新聞である。創刊号は1925（大正14）年5月23日であり、終刊は1944（昭和19）年2月12日の974号であった。

記事の内容については、前田による『教育週報』復刻版の解説によると「タブロイド判八頁が平均の紙面は、一面が時事論考、二面、七面が報道記事、三面、四面、五面が連載記事や学術学説、六面が地方版や文芸、八面が連載記事や為藤五郎の『一週一信』、といった構成が基本的なものであった」<sup>4</sup>と指摘している。特に1面の体裁については、時事論考に相当する巻頭記事を1本掲載しているほか、創刊号では為藤五郎の創刊の辞<sup>5</sup>が、十周年の記念号では培風館による一面広告<sup>6</sup>がそれぞれ掲載されている。なお、「八頁が平均」という点については、十周年記念号は全部で12面あり、その他10面構成となる記事も散見されることから、厳密なものではない。

次に論調であるが、前田は『教育週報』復刻版の解説で、紙面の特徴について以下のように述べている<sup>7</sup>。

紙面の特徴は、おおそ五つに分けることができよう。第一に、教育者擁護の基本的価値が明確なこと、それゆえに文部省の教育政策に対してはたえず批判的に注目していること、第二に、新教育運動や義務教育年限延長運動などの教育運動擁護の立場に立っていること、第三に、社会的弱者の擁護に立っていること、第四に、文部省はじめ、初等・中等・高等に至るまでの人間像を縦横無尽に紹介していること、および学校や教育実践を豊富にとりあげていること、第五に、中央の動向だけでなく、東京も含めた地方の情報収集にも力を用いていること等である。

前田はこれに続けて、第一点目は創刊時から一貫した姿勢であったこと、第二点目は帝国教育会や教育評論家協会と一体となって強力な促進運動を行っており、教育団体や教育週報社による座談会が開催されていたことを指摘している<sup>8</sup>。また、第四点目に関しては前稿で扱った355号で創立間もない時期の明星中学校と児玉九十も紹介されていた<sup>9</sup>が、前田は「新教育学校や、新しい時代の動向を踏まえて実践している学校紹介が多い」<sup>10</sup>と指摘している。

このように、『教育週報』の論調は、教育者や教育運動を擁護する立場を明確にする一方で文部省による教育政策について批判的であり、文部省、教育関係者、中央、地方のいずれかに偏することのない立場であった。このことから、教育畑出身ではなかった私立学校の児玉九十の意見が掲載される土台が整っていたと考えることができるであろう。

次に、『教育週報』における、児玉九十による45本の記事を出版年別にみると以下の通りである。（下線は期間中最多の本数を示す）

1932（昭和7）年	1本（座談会1本、その他複数0本、単独0本うち巻頭0本）
1933（昭和8）年	1本（座談会0本、その他複数0本、単独1本うち巻頭1本）
1934（昭和9）年	<u>11本（座談会6本、その他複数4本、単独1本うち巻頭1本）</u>
1935（昭和10）年	7本（座談会2本、その他複数3本、単独2本うち巻頭1本）
1936（昭和11）年	4本（座談会0本、その他複数3本、単独1本うち巻頭1本）
1937（昭和12）年	1本（座談会0本、その他複数1本、単独0本うち巻頭0本）
1938（昭和13）年	5本（座談会0本、その他複数3本、単独2本うち巻頭0本）
1939（昭和14）年	1本（座談会0本、その他複数0本、単独1本うち巻頭0本）
1940（昭和15）年	7本（座談会3本、その他複数1本、単独3本うち <u>巻頭2本</u> ）

1941（昭和16）年 5本（座談会0本、その他複数1本、単独4本うち巻頭1本）

1942（昭和17）年 2本（座談会0本、その他複数2本、単独0本うち巻頭0本）

全体の本数が最も多いのは初登場から2年後の1934（昭和9）年の11本であり、座談会、その他複数記事ともに全期間中で最も多い。次いで全体の本数が多いのは1935（昭和10）年と1940（昭和15）年の7本であり、とくに後者は巻頭記事も2本と最多であった。翌1941（昭和16）年は単独記事が4本と最も多かった。

児玉九十による記事が初めて見られるのは1932（昭和7）年「財団法人と私学の経営 諸家座談会」（397号）である<sup>11</sup>。同年の355号では前稿で扱った「人物の片影（三五五）新寺子屋教育の児玉九十君」が掲載されており、全国的にはまだ有名でなかった開校5年の明星中学校と教育者児玉九十の姿が伝えられている<sup>12</sup>。

その後、1933（昭和8）年に初めての巻頭記事「私学審査会の提唱」を執筆すると、翌1934（昭和9）年から1935（昭和10）年にかけて多くの記事に関わっている。以降、執筆数は前後するが、1940（昭和15）年には再び増加する。前稿で指摘した通り、この時期に児玉は大政翼賛会の臨時中央協力会議員に就任しており、教育者の代表として評価される立場であった<sup>13</sup>。この頃の記事の傾向も大政翼賛会関連のものが多く。

## 2. 児玉九十の参加した座談会記事

児玉九十の参加した座談会記事は12本であり、おおむね10名から20名程度の参加者による構成になっている。児玉九十が登場する座談会記事は以下の通りである。

表1 児玉九十の参加した座談会記事一覧

号	（面）	発行年	月	日	記事名	備考（参加者）
397	（4）	1932	12	25	財団法人と私学の経営 諸家座談会	座談会（大妻コタカ、児玉九十、曾根松太郎、 為藤五郎、手塚岸衛、畠山源蔵、濱幸次郎、 濱野重郎、原田長松、峰間信吉、渡辺滋共著）
467	（4）～（5）	1934	4	28	東京府知事の主催で府教育の改善を 語る大座談会 —各方面の代表者を網羅して	座談会（香坂知事（昌康）、篠山課長（千之）、 長谷川乙彦、為藤五郎、松下専吉、川村理助、 下川兵次郎、児玉九十、古谷剛次郎、山田清、 市川源三、清水由松）
479	（3）	1934	7	21	文相諸問題山積 —松田新文相に望む現前の教育諸問題 を語り論ずる本社主催座談会	座談会（稲毛詛風、小原國芳、馬上孝太郎、 相澤熙、児玉九十、高良富子、池岡直孝、 下中彌三郎、為藤五郎）
480	（3）	1934	7	28	松田文相に望む 大調査会を設けよ 現前の教育諸問題を語り論ずる 本社主催座談会	座談会（稲毛詛風、小原國芳、馬上孝太郎、 相澤熙、児玉九十、高良富子、池岡直孝、 下中彌三郎、為藤五郎）
481	（4）	1934	8	4	文政刷新の唯一手段 教育参謀本部の要 現前の教育諸問題を語り論ずる 本社主催座談会	座談会（稲毛詛風、小原國芳、馬上孝太郎、 相澤熙、児玉九十、高良富子、池岡直孝、 下中彌三郎、為藤五郎）
482	（6）	1934	8	11	学制改革の前提に 教育国策研究所 現前の教育諸問題を語り論ずる 本社主催座談会	座談会（稲毛詛風、小原國芳、馬上孝太郎、 相澤熙、児玉九十、高良富子、池岡直孝、 下中彌三郎、為藤五郎）

号	(面)	発行年	月	日	記事名	備考 (参加者)
483	(6)	1934	8	18	法人組織が問題の私立学校の経営 現前の教育諸問題を語り論ずる 本社主催座談会	座談会 (稲毛詛風、小原國芳、馬上孝太郎、 相澤熙、児玉九十、高良富子、池岡直孝、 下中彌三郎、為藤五郎)
533	(3)	1935	8	3	選挙肅正を語る 教育者の大座談会 帝国教育会の主催	座談会 (相澤熙、上沼久之丞、小野源蔵、 小菅吉蔵、児玉九十、櫻井伊兵衛、下村壽一、 曾根松太郎、武部欽一、龍山義亮、為藤五郎、 千秋季隆、津田信良、野口彰、長谷川乙彦、 堀地英一、馬上孝太郎、松井茂、松原一彦、 前田多門、宮田修、山川健、吉田熊次、永田 秀次郎、藤井利譽)
535	(6)	1935	8	17	日本に於ける新教育の動向 新教育会議の座談会	座談会 (今岡信一郎、乾源七、稲森縫之助、 石川ふさ、大江スミ、小野源蔵、金子喜一郎、 鯨岡逸郎、児玉九十、小林澄兄、榊原孫太郎、 榊原喜久治、佐々木敏雄、白石鎮男、長瀧武、 野村芳兵衛、花木チサヲ、堀田源市、朴永孫、 馬淵駿一、森田良克、山内佐太郎、山崎博、 美野光太郎)
784	(4)	1940	5	25	文部当局と私学振興を語り合う座談 会 私学振興同盟主催	座談会。複数共著、署名不明瞭(約二十名出席)
785	(4)	1940	6	1	文部当局と私学振興を語り合う座談 会 (二) 私学振興同盟主催	座談会。複数共著、署名不明瞭(約二十名出席)
786	(4)	1940	6	8	文部当局と私学振興を語り合う座談 会 (三) 私学振興同盟主催	座談会。複数共著、署名不明瞭(約二十名出席)

『教育週報』において児玉九十が最初に座談会に登場するのは、署名付き記事の初登場でも触れた「財団法人と私学の経営 諸家座談会」である。児玉はその後、1940（昭和15）年の「文部当局と私学振興を語り合う座談会（三）私学振興同盟主催」（786号）まで計12本の座談会に参加している。このうち、784号、785号、786号の3本は連続した記事であり、各記事における署名は不明瞭である。

『教育週報』は教育運動擁護の立場に立って団体主催や教育週報社主催の座談会を開催しており、児玉九十が参加した座談会の主催者は教育週報社5本、私学振興同盟3本、新教育会議1本、帝国教育会1本、東京府知事1本、紙上に明確でないもの1本であった。紙面については3面から6面にわたっているが、前田の指摘した「三面、四面、五面が連載記事や学術学説、六面が地方版や文芸」という平均像のうち「学術学説」におおむね合致する。

さて、座談会の内容については、上記の「財団法人と私学の経営 諸家座談会」や「法人組織が問題の私立学校の経営 現前の教育諸問題を語り論ずる 本社主催座談会」（483号）、「文部当局と私学振興を語り合う座談会 私学振興同盟主催」（784、785、786号）などのように、私立学校について取り上げたものが多い。

これらの記事の署名は明星中学校長であるが、児玉九十と私立学校の関係に注目すると、1932（昭和7）年2月に全国私立学校恩給財団（後の私立学校教職員共済組合）の理事に就任している。このことについて、『児玉九十自伝』では「私学の教職員が誇りと自信をもって教育に専念するための、地位と生活のかかっている責任の重い任務でした。私は学校の業務に支障のないかぎり全力を傾けて奔走しました」<sup>14</sup>と述べられている。また、児玉九十は1934（昭和9）年の財団十周年記念に功労者として表彰されている<sup>15</sup>。そのため、これらは明星中学校の校長の立場に加えて私立学校の代表者としての立場のある時期の発言と位置付けることができるであろう。



### 3. 座談会以外の複数執筆者による記事

座談会を除く児玉九十による記事のうち、複数人に取材や寄稿を求めたものは以下の18本であり、10名前後の座談会に近い規模から2名による記事まで幅広い。またそのうち3本は『この道五十年』に収録されている。

表2 座談会以外で児玉九十が関連した複数執筆者による記事一覧

号	(面)	発行年	月	日	記事名	備考（共著者）
459	(4)	1934	3	3	問題を投げる（その十六） 青年学生の徳育改善方法如何	（児玉九十提題、小澤恒一、小川陸郎、岡本作次郎、岡田恒輔）
463	(4)	1934	3	31	問題を投げる（その廿一） 教育者の事大主義	（原田実提題、尾高豊作、千葉春雄、龍山義亮、児玉九十）
471	(6)	1934	5	26	問題を投げる（その廿九） 教育社会より陰鬱を駆除するには	（小澤恒一提題、児玉九十、常田宗七、木内キャウ、小野源三）
482	(7)	1934	8	11	世界教育会議を迎える準備 教育会は、教育者は	（上沼久之丞、山榊儀重、入澤宗壽、岸邊福雄）
503	(7)	1935	1	5	現状でよきか文政審議会 教育界の不満 冷静な批判に聴け 新陳代謝の要	（中野礼四郎、中澤留、児玉九十、大東重善、千葉春雄、磯貝泰助、松原一彦、野瀬寛顕、高山潔、山榊参与官）
517	(3)	1935	4	13	茗溪会の教育振興パンフレットを見て その一	（児玉九十、山下谷次、相澤熙）
529	(7)	1935	7	6	教育革新への諸家の意見 茗溪会主催の懇談会	（荒川五郎、児玉九十、池田秀雄、紀俊秀、千秋季隆、吉澤徹、関口泰、山榊儀重、曾根松太郎、斯波安子、安藤正純、山下谷次、宮田修、津田信良、野村嘉六、三輪田元道、木場貞長）
560	(2)	1936	2	8	定石になった「素人文相」の是非？ 教育諸家何と見る—教育畠が当然	（小林澄兄、児玉九十、中澤留、小澤恒一、野口援太郎、若月岩吉）
571	(3)	1936	4	25	文相適材払底の匡救策	2面「中等学校前校長の名で文政素人化に不満」の解説記事
580	(7)	1936	6	27	高所に立って団結の強化へ	「文相の教育評論家招待」の関連記事 <sup>16</sup>
657	(2)	1937	12	18	上諭を拝し 生れた教育審議会を見て 人選は？ 希望は？ 教育界諸家に聞く 小田原評定を排す	（池岡直孝、小林澄兄、児玉九十、小原國芳、野口彰、相澤熙、豊田潔臣、吉岡女史）
659	(6)	1938	1	1	輿論に聴く 学制改革案（一） 学制改革の重点	『この道五十年』収録 （児玉九十、宮内与三郎）
702	(4)	1938	10	29	わが校の非常時教育（其七） 明星中学校	『この道五十年』収録 （鈴木静穂、児玉九十）
707	(4)	1938	12	3	長期建設に対応する教育（二）	『この道五十年』収録 （赤坂清七、児玉九十）
773	(5)	1940	3	9	入学新制度の収穫 学校経営還元 児童は明朗化 中等、小学校長語る	（伊藤清一、津田信良、児玉九十、宮内興三郎、茂串小市郎）

号	(面)	発行年	月	日	記事名	備考 (共著者)
858	(2)～(3)	1941	10	25	全国民にも亦鉄石の覚悟あり!! 新内閣に対する教育界の声 唯号令を待つ	(中澤留、池田種生、某氏、中島正勝、紀平正美、寺門照彦、宮田斉、相澤熙、松原一彦、矢野西雄、馬上孝太郎)
882	(6)	1942	4	11	文化人たち翼賛選挙に進出 翼賛選挙推進懇談会 諸家の意見	(中野登美雄、児玉九十、有馬生馬、小畑忠良、久米正雄、岸田國士)
899	(3)	1942	8	8	文部新機構 諸家の所見と希望 人の問題	(金井浩、森田重次郎、櫻井賢三、中澤留、児玉九十、馬上孝太郎、竹田菊、相澤熙)

これらの記事を概観すると、1935(昭和10)年「教育革新への諸家の意見 茗溪会主催の懇談会」(529号)や1937(昭和12)年「上諭を拝し 生れた教育審議会を見て 人選は? 希望は? 教育界諸家に聞く 小田原評定を排す」(657号)のように「諸家」や「懇談会」と題する記事もあり、座談会との区別が難しいが、記事名に「座談会」と明記されていないものについては、すべて表2にまとめている。また、1934(昭和9)年「問題を投げる(その十六) 青年学生の徳育改善方法如何」(459号)では提題者となっており、中学校教育に携わった児玉の問題意識を見ることができる。

表1と表2を足した複数執筆者からなる記事について、児玉と共著となった人物の中で複数回登場する人物は以下の通りである。

相澤熙	10回	中澤留	4回	小野源蔵	2回
為藤五郎	8回	小林澄兄	3回	上沼久之丞	2回
馬上孝太郎	8回	小澤恒一	3回	千秋季隆	2回
小原國芳	6回	松原一彦	3回	千葉春雄	2回
池岡直孝	6回	津田信良	3回	曾根松太郎	2回
稲毛詛風	5回	宮田修	2回	長谷川乙彦	2回
下中彌三郎	5回	山下谷次	2回	野口彰	2回
高良富子	5回	山榊儀重 <sup>17)</sup>	2回	龍山義亮	2回

なお、1回のみの共著者は102名いるが、「香坂知事」「篠山課長」<sup>18)</sup>のように氏名ではなく職名で記されるものや「某氏」<sup>19)</sup>のように匿名となっているものもある。

最も多い相澤熙は国民教育奨励会理事と同顧問、東京日日客員の肩書で登場する人物である。また、為藤五郎は教育週報社の社長であり、馬上孝太郎は帝国教育会理事、東京高師附中主事、茗溪会理事長の肩書で登場する。これらの人物は主として座談会に登場することから、児玉九十が直接、もしくは紙面で間接的に関係を持ったことが分かる。なお、児玉については他の肩書がある時期でも記事の肩書を示す場合はすべて明星中学校長であった。

次に、『この道五十年』に収録された「学制改革重点」<sup>20)</sup>、「長期建設に対応する教育」<sup>21)</sup>、「わが校の非常時教育」<sup>22)</sup>(いずれも『この道五十年』における表題)についても概観しておきたい。これらは、それぞれ特定の論題について2件の記事が掲載される形式である。これらは単独の記事ではないため併記される記事について述べておきたい。

まず「学制改革重点」は1938(昭和13)年「学制改革の重点」(659号)を収録したものである<sup>23)</sup>。原典は「輿論に聴く 学制改革案(一)」というシリーズ名が付され、児玉の記事の後に宮内与三郎による「吾人の主張する学制改革案」が掲載されている。児玉の署名の前には「明星中学校長」、宮内の署名の前には「東京市小学校長会幹事長」の肩書がそれぞれ示されている。

次に、「長期建設に対応する教育」は1938（昭和13）年「長期建設に対応する教育（二）」（707号）の児玉の記事を収録したものである<sup>24</sup>。時系列では「わが校の非常時教育」が702号であるため順番が前後するが、『この道五十年』では「長期建設に対応する教育」が先に掲載されている<sup>25</sup>。「長期建設に対応する教育（二）」は2名による記事で、赤坂清七の「大国民の養成」と題する記事の後に児玉九十の記事が掲載されているが、児玉の記事の表題はない。赤坂の署名の前には「大阪毎日論説委員」、児玉の署名の前には「明星中学校長」の肩書がそれぞれ示されている。

最後に「わが校の非常時教育」は1938（昭和13）年「わが校の非常時教育（其七） 明星中学校」（702号）を収録したものである<sup>26</sup>。原典は「其七」というシリーズ番号が付され、「東京府立農芸学校」と題する鈴木静穂の記事に続いて「明星中学校」と題する児玉九十の記事が掲載されている。両者の署名の前にはいずれも「校長」の肩書が示されている。

このように、『この道五十年』に掲載された児玉の記事は、いずれも単独の記事ではなく特定の論題の下に並べられた複数記事の一つとして掲載されたものであった。児玉と並べられた論者は公立学校長、新聞論説委員、府立学校長であり、児玉には私立学校長や教育者としての発言が求められていたと考えられる。

#### 4. 児玉九十による単独記事

児玉九十による単独記事は以下の15本であり、うち1本は『この道五十年』に収録されている。なお、単独記事の体裁ではあるものの、同一ページでテーマ的に関連する記事がある場合は備考に「関連記事あり」と示している。

表3 児玉九十による単独記事一覧

号	(面)	発行年	月	日	記事名	備考
442	(1)	1933	11	4	私学審査会の提唱	巻頭記事
497	(1)	1934	11	24	中学四年制説	巻頭記事
534	(4)	1935	8	10	小刀細工の中学校制度文部案	
547	(1)	1935	11	9	文部省改革論（五）先づー教学局の設置	巻頭記事
563	(1)	1936	2	29	総選挙の所感	巻頭記事
679	(6)	1938	5	21	曲つた事は嫌ひだが 調和的な菊池君 児玉九十氏談	関連記事あり <sup>27</sup>
692	(7)	1938	8	20	無縫録	
761	(4)	1939	12	6	茗溪会の師範大学案を読みて	関連記事あり <sup>28</sup>
776	(1)	1940	3	30	心のたが	巻頭記事
798	(1)	1940	8	31	村長との雑談	巻頭記事
813	(7)	1940	12	14	協力会議へ教育者の叫び 翼賛会は広義の教育運動 (唯一の教育代表) 児玉九十氏談	関連記事あり <sup>29</sup>
815	(7)	1941	1	1	翼賛会中央協力会議に列席しての所感	
841	(5)	1941	6	28	科学教育振興上の改善事項	
846	(4)	1941	8	2	中央協力会議に於ける中等学校入学問題	『この道五十年』収録
853	(1)	1941	9	20	生産拡充と教養の問題	巻頭記事

単独記事の傾向は、おおむね1面の「時事論考」に相当する巻頭記事と4面か5面の「学術学説」に分けることができる。なお、唯一7面で掲載された「無縫録」は雑記であり、同名のタイトルで他の教育関係者も寄稿している。

次に、児玉が関わった巻頭記事について概観したい。児玉が巻頭記事を執筆したのは1933（昭和8）年「私学審査会の提唱」（442号）、1934（昭和9）年「中学四年制説」（497号）、1935（昭和10）年「文部省改革論（五）先ず—教学局の設置」（547号）、1936（昭和11）年「時評 総選挙の所感」（563号）、1940（昭和15）年「心のたが」（776号）と「村長との雑談」（798号）、1941（昭和16）年「生産拡充と教養の問題」（853号）の計7本である。

巻頭記事はいずれも時事的な内容を取り扱っており、一見すると内容の不明な「心のたが」はインフレと戦時体制の予算成立に関する記事<sup>30</sup>であり、「村長との雑談」は国民精神総動員運動に関連する記事<sup>31</sup>である。学校教育や文教政策に関する記事からはじまって、時局が進むにつれて戦時体制の内容に移り変わっていく様子が窺える。

この中で「中学四年制説」については、『この道五十年』に同名の論考が掲載されているが、出典と掲載時期が欠落しておりこれまで特定することができなかった<sup>32</sup>。今回両者を比較したところ、これらの内容はほぼ一致したことから、『教育週報』の記事である可能性が極めて高いことが確認できた。なお、記事の内容自体は1932（昭和7）年12月発行の岩波講座「教育科学」の「中学校教育問題のシムポジウム」<sup>33</sup>で児玉が展開した持論と類似している。

他に『この道五十年』に収録された「中央協力会議に於ける中等学校入学問題」<sup>34</sup>には、記事の末尾に「本編は筆者たる児玉明星中学校長に乞うて『体験教育』より転載したものである」<sup>35</sup>という注意書きがあるが、『この道五十年』に収録されたページにはこの注意書きが欠落している<sup>36</sup>。

## まとめ

『教育週報』における児玉九十による記事を概観すると、1932（昭和7）年の登場当初は明星中学校という私立学校の校長の立場に加えて、全国私立学校恩給財団の理事就任を背景とした私立学校の代表者としての立場も見られ、座談会などの複数人による記事の割合が多い。また、1940（昭和15）年以降は大政翼賛会の臨時中央協力会議員として教育者の代表の立場も加わり、単独記事の割合が増加している。しかし、児玉の肩書がある記事はすべて明星中学校長と示されていたことから、様々な背景を持ちつつも、『教育週報』紙上で立場は明星中学校長を第一とすることで一貫していたと考えられる。

次に、児玉の著作集である『この道五十年』には、『教育週報』掲載記事として「学制改革重点」、「長期建設に対応する教育」、「わが校の非常時教育」、「中央協力会議に於ける中等学校問題」の4本の収録が確認されていたが、単独記事として独立しているのは巻頭記事である「中央協力会議に於ける中等学校入学問題」のみで、残りの3本については複数の執筆者による寄稿をあつめた特集記事であることが明らかになった。これらは単独の論考として考えるのではなく前後の記事を併せて把握する必要がある。また、「中央協力会議に於ける中等学校問題」も『教育週報』のために書かれたものではなく、『体験教育』の転載であった。加えて、出典と掲載時期不明であった「中学四年制説」は『教育週報』の記事とほぼ一致したため、5本目の掲載記事であった可能性が極めて高いことが明らかになった。

また、『この道五十年』への『教育週報』記事の収録傾向を見ると座談会についての収録がない。『この道五十年』は児玉個人の著作集であるため単独の記事を収録した可能性もあるが、座談会記事を検討することで先行研究にない児玉九十像を加えることができると考えられる。

これまで『この道五十年』を取り扱ってきたが、本稿において使用した掲載記事に関しては表題や日付の相違、内容の欠落などが明らかになった。『この道五十年』のまえがきには「元々これは系統立った研究書でもなく、論文集でもなく、その時々に応じて話したり書いたりしたものを集めた、至って粗雑なものであります」<sup>37</sup>と記されているが、編集自体も極めて粗雑であって、原典に忠実な収録が十分に行われていない可能性があることを指摘しておきたい。

資料を整理する中で、1936（昭和11）年「高所に立つて団結の強化へ」（580号）において児玉九十が明星中学校長に加えて帝国教育会評議員の立場でも発言していたことが確認できた<sup>38</sup>。帝国教育会は『教育週報』が紙面で取り



上げた教育団体にも含まれており、児玉は同時期の『帝国教育』にも寄稿している<sup>39</sup>。児玉と帝国教育会の関係については本稿で言及することができなかったため、今後の課題としたい。

## 註

- 1 廣嶋龍太郎「『教育週報』と児玉九十（1）—教育週報による児玉九十の評価」『明星—明星大学明星教育センター研究紀要』（6）、2016年、1-12頁。
- 2 同上書、1頁。
- 3 「第二回協力会議 教育関係議題（三）」『教育週報』（867）1941年3面と、「決戦教育の確立を議題 中央協力会議に見る」『教育週報』（948）1943年1面に児玉九十提出の議題があり、児玉の名前が確認できる。
- 4 中野光監修、中野光・前田一男解説『教育週報 解説・総目次・索引』大空社、1994年、365頁。
- 5 為藤五郎編『教育週報』（1）、1925年、1面。（中野光監修、中野光・前田一男解説『教育週報』第1巻所収）
- 6 為藤五郎編『教育週報』（523）、1935年、1面。（中野光監修、中野光・前田一男解説『教育週報』第10巻所収）
- 7 前掲『教育週報 解説・総目次・索引』366頁。
- 8 同上書、366-367頁参照。
- 9 為藤五郎編『教育週報』（355）、1932年、4面。（中野光監修、中野光・前田一男解説『教育週報』第8巻所収）
- 10 前掲『教育週報 解説・総目次・索引』368頁。
- 11 為藤五郎編『教育週報』（397）、1932年、4面。（前掲『教育週報』第8巻所収）
- 12 前掲『教育週報』（355）、4面。
- 13 為藤五郎編『教育週報』（813）、1940年、7面。（中野光監修、中野光・前田一男解説『教育週報』第16巻所収）
- 14 児玉九十伝編纂委員会編『児玉九十自伝』明星大学出版部、1990年、258頁。
- 15 同上。
- 16 直前記事の「小学教員会は帝教に加盟せず 二重になるから…」とを補完する形で掲載されている。為藤五郎編『教育週報』（580）、1936、7面。（中野光監修、中野光・前田一男解説『教育週報』第12巻所収）
- 17 『教育週報』503号に「山榊参与官」と表記されたものを加えると3件になる。
- 18 為藤五郎編『教育週報』（467）、1934年、4面。（前掲『教育週報』第10巻所収）
- 19 為藤五郎編『教育週報』（852）、1941年、2面。（中野光監修、中野光・前田一男解説『教育週報』第17巻所収）  
なお、末尾には「（回答に脱名のため）」の但し書きがある。
- 20 明星学苑編集委員会『この道五十年』1965年、447-450頁。なお、原題にある「の」の文字は『この道五十年』に表記されていない。
- 21 同上書、457-460頁。原題には「（二）」の文字が入る。
- 22 同上書、461-464頁。原題には「（其七） 明星中学校」の文字が入る。
- 23 為藤五郎編『教育週報』（659）、1938年、6面。（中野光監修、中野光・前田一男解説『教育週報』第14巻所収）
- 24 為藤五郎編『教育週報』（707）、1938年、4面。（同上書所収）
- 25 前掲『この道五十年』464頁。同書には「昭和十三年十二月二十九日」と記されているが、原典の日付は「昭和十三年十月二十九日」であり、原典の確認ミスか書き取りミスであると考えられる。
- 26 為藤五郎編『教育週報』（702）、1938年、4面。（前掲『教育週報』第14巻所収）
- 27 為藤五郎編『教育週報』（679）、1938年、6面。（同上書所収）書名なしの記事「新視学課長に菊池龍道氏が決定 山口中学校長から」と並んで掲載されている。

- 28 為藤五郎編『教育週報』(761)、1939年、4面。(前掲『教育週報』第16巻所収) 谷本富「高師三一会に贈る」と並んで掲載されている。
- 29 為藤五郎編『教育週報』(813)、1940年、7面。「翼賛会の臨時協力会議員 教育界から児玉氏たゞ一人 人選の跡を見る」と並んで掲載されている。(同上書所収)
- 30 為藤五郎編『教育週報』(776)、1940年、1面。(同上書所収)
- 31 為藤五郎編『教育週報』(798)、1940年、1面。(同上書所収)
- 32 廣嶋龍太郎「児玉九十著作目録の再検討(1)」『明星—明星大学明星教育センター研究紀要』(4)、2014年、5頁。
- 33 「岩波講座教育科学」第十五冊、岩波書店、1932年。
- 34 同上書、487-491頁。原典は「中央協力会議に於ける中等学校入学問題」『教育週報』(846)、1941年。原題には「入学」の文字が入る。
- 35 為藤五郎編『教育週報』(846)、1941年、4面。(前掲『教育週報』第17巻所収)
- 36 前掲『この道五十年』491頁。
- 37 前掲『この道五十年』まえがき。(ページ番号なし)
- 38 前掲『教育週報』(580)、7面。記事は「右に就き帝国教育会評議員児玉九十氏は語る。」という冒頭分で始められている。
- 39 拙稿「児玉九十の著作目録の再検討(1)」で確認できた『帝国教育』関連記事を列挙すると以下の12本である。(著者はすべて児玉九十)
- 「満洲國助成は天與の使命なり」『帝国教育』(611)、1932年
- 「中學教育界への要望」『帝国教育』(617)、1933年
- 「功利主義・利己主義教育の破産」『帝国教育』(634)、1933年
- 「教育時評(文部省内の軋轢農民道場)」『帝国教育』(650)、1934年
- 「時局偶感」『帝国教育』(665)、1936年
- 「内審の文教刷新の目標を評す」『帝国教育』(692)、1936年
- 「小学教育内容改善の重点」『帝国教育』(700)、1937年
- 「銃後後援強化週間第一日生徒への訓話」『帝国教育』(721)、1938年
- 「中學校教育の改革」『帝国教育』(726)、1939年
- 「支那視察より還りて」『帝国教育』(730)、1939年
- 「高等学校及中学校問題」『帝国教育』(731)、1939年
- 「生活と錬成」『帝国教育』(779)、1943年

## 追記

本稿を執筆するにあたり、当時教育学科4年生だった貞清裕介君と松崎遼大朗君に資料整理を手伝ってもらったことに深く感謝したい。